

# イスパニア音楽の特徴 XIV bis

## インターミッション

### — 地域差と多様性 パイス・バスコ その二 —

José Santiago ÁLVAREZ – TALADRIZ

＜それでは民俗音楽のソルチコは、如何なるものなのであろうか。そのヴァリエーションは、甚だ多く、いまだに十分な、視座が得られていないので、さらに検討を加えて、次稿に譲ることとする。とした締めくくった論文のつづき。＞

#### 民俗音楽のソルチコ

先稿の「ソルチコという形式」で、ソルチコの多様性について、舞曲、声楽曲、歌唱を伴う舞曲等が、存在すると述べた。ここで、民俗音楽のソルチコを見るにあたり、そのタイトルの表記についても少々言及しておく必要がある。「ソルチコという形式」の直前に、ソルチコの表記を3種類挙げた。Zorcico, Zortziko, Zortzico がそれである。

ところが、民俗音楽の世界では、ほかの表記もみられる。どの様なものが存在するのかを、まずは、日本で出版された西和辞典を見てみると、上記以外のものとして、zorzico が挙げられている。ここでは、バスク語の表記のようにしてこの綴りが挙げられていたが、バスク語の標準的な綴は、Zortziko であろう。Zorzico は、ガジェゴ、つまり、ガリシア地方の言語の表記と考えられるのだが、比較的信頼度が高いとされる西和辞典にこの表記があるので、エウスケラ バスク語を解する人物に確認したが、Zorzico の表記は、バスク語の文章の中で目にすることは、ほとんどないとのことであった。

更に、イスパニアで出版された辞書を当たると、地域言語の正字法により書かれた、幾つかの綴りを見いだすことができる。ここで、全てを挙げることはしないが、zi ⇔ ci の異同、ko ⇔ co の異同がほとんどであった。したがって、楽曲のタイトルや曲種の表示に於いて、この辺りの綴りの異同は、おおらかに対応していくこととする。

さて、Zortziko についての日本での認識が、民俗音楽のソルチコにも通用するかは、少々疑問の余地がありそうだ。芸術音楽のソルチコに触れたときには、日本で知られている Zortziko に限りがあり、「ソルチコと言えば、こういうタイプのもの」と、何らかの共通理解のもとで、事が済んでしまうのだが、芸術音楽とは違い、民俗音楽のソルチコの場合ことは単純ではない。

では、日本で、「ソルチコと言えば、こういうタイプのもの」と、思われているタイプの

Zortziko は、どのようなものなのか。筆者の手元にある音楽辞典で、確認しておこう。

まず、最も一般的に用いられている音楽之友社の新音楽辞典 — 楽語 — によると、「ソルツィコ(まま) Zortziko Zortzico [バスク] スペイン北部バスク民謡および舞踏。付点音符のついた 5/8 拍子で、言語学的に起源不明の独特の言語バスク語で歌われる。この 5/8 拍子は、19 世紀の中ごろ生れたとの説がある。アルベニスやサラサーテなどの作品に取り上げられている。」とある。

次に、詳しい音楽事典として定評のある、平凡社の音楽大事典の項目をみると、「ソルツィコ Zortziko [バスク] Zorcico [スペイン] バスク地方の民謡、および舞踊。チストゥ(縦笛)、太鼓などによって演奏され、バスク語あるいはスペイン語で歌われる。そのリズムは 8 分の 3 拍子と 8 分の 2 拍子の融合した形をしており、古くはいろいろな形で書かれた。ソルツィコに関する早い記録には 1802 年ドイツのフンボルト Karl Wilhelm von Humboldt によるものがある。バスクの吟遊詩人イパラギレ José María Iparraguire (1820~81) の詩による <ゲルニカの木 Guernika'ko arbola > は非常に有名になり、バスクの国民歌といえるほどである。その後の芸術的作品としてサラサーテやアルベニスなどの曲がある。(譜例省略)」と、記されている。

これらの二つの記述を総合しても、ソルチコ (Zortziko) の詩における韻律に関しては、何も明らかではないし、多くの音楽関係者が、ソルチコの韻律について、無知である。日本では、詩との関連でソルチコが、とらえられることは少なく例に挙げられるものも、バスクの国民歌といえるほどであるイパラギレの『ゲルニカの木』を除けば、日本でも知名度のあるアルベニスやサラサーテの器楽曲のみである。

先稿でも述べたように、ソルチコ (Zortziko) の詩形には、いくつかの種類があり、その詩行のシラブルの数や、韻の踏み方が異なっている。したがって、異なる韻律を有する詩としてのソルチコが、民俗音楽として歌われた場合には、記譜に用いられる拍子や拍節感、基本的なリズムパターンも、異なったものとなることは、疑う余地は無い。

先稿に挙げた書物 Karlos Sanchez Ekiza 著の“En torno al Zortziko”の一覧表にもある様に、記譜に用いられる拍子は、Zortziko txikia に限っても単一ではない。

ソルチコ (Zortziko 等) の語の意に、詩形としてのそれが含まれる語であることは、イスパニアで刊行された音楽事典“Diccionario de la Música Española e Hispanoamericana”の記述からも明らかである。“Danza. El zortziko vasco Nació como ritmo musical y literario.”と、詩や文学の韻律とのかかわりを、“como ritmo musical y literario”として、明確に示している。

ここでは、まずはじめに、5 拍子で記譜された民俗音楽のソルチコの例を取り上げて、その上で、記譜にみられる拍節感の揺れを見てみたい。

では、民俗音楽のソルチコとしての『ゲルニカの木 (Gernikako Arbola)』から、見てみよう。Karlos Sanchez Ekiza 著の“En torno al Zortziko”の一覧表にもある様に、この楽曲は、

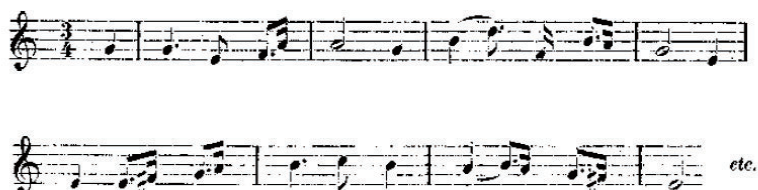
Zortziko txikia に分類されている。この種のソルチコの記譜は、常に5拍子というわけではない。しかし Iparraguirre の『ゲルニカの木 (Gernikako Arbola)』は、5拍子で記譜されることが一般的である。では民俗音楽的に、この楽曲を見た場合如何なる拍子の記譜が一般的ななのであろうか。

“Del Gernikako Arbola a La Marsellesa de la Paz. Música, política e ideología en Vizcaya” という María Nagore Ferrer 氏の論文には、5拍子での記譜が見られる。ところが、一方で、多くの場合、古くは5拍子の記譜は見当たらないとの注記を付けたうえで、F. Gáscue 氏は、“ORÍGEN DE LA MÚSICA POPULAR VASCONGADA.” という論文の中で、8分の6拍子か4分の3拍子が一般的であるとして、3拍子による記譜を載せている。

ここで、注意しなくてはならないことは、記譜と、演奏との関係が、どのように考えられるべきか、と言う点である。民俗音楽の担い手のすべてが、五線譜による記譜に、精通しているわけではない。この点について、イスパニア北部で、筆者自身がイスパニア民俗音楽の採譜を行なった折に、Txistu と Tambor の複数の奏者が、歌を伴う踊りの伴奏をしているのを採譜した折のことを思い出した。Txistulari と言われる Txistu と Tambor を一人で演奏する奏者が、一人は4分の4拍子、もう一人は8分の5拍子で記譜された楽譜を持っており、それでいて、アンサンブルが成立しているという場面に遭遇したのである。彼らは、楽譜の正確な再現者ではなく、歌と踊りの伴奏者として、歌い手や踊り手とのアンサンブルを成立させるべく、音楽する立場をとっていると考えられる。つまり、楽譜は、「記憶の助け」であったり、「逸脱を避けるメモ」であったりするものにすぎないのである。

ここに、芸術音楽における楽譜の規範性とは違う側面のあることにも、留意する必要があるようだ。これらの点を踏まえて、民俗音楽のソルチコを見てみよう。まず、民俗音楽としての『ゲルニカの木 (Gernikako Arbola)』を、記譜に注目し、見ていこう。先に挙げた“ORÍGEN DE LA MÚSICA POPULAR VASCONGADA.”に、次の様な譜例がある。

### El Árbol de Guernica (Gernikako Arbola)



また、“Euskal Kattutegia”には、採譜例が掲載されている。採譜者は、JULES VINSON 氏と

される。民謡を合唱曲として扱う団体からの情報で、このウェブサイトを知ったが、採譜地、採譜日時は、不明である。(http://www.euskonews.com/0138zbk/kan0138.html) タイトルは、“L'Arbre de Guernica”と、フランス地域のバスク地方の言語表記に近くなっていることから、フランス語圏のものかとも考えられるが、イスパニア国内のナバラ地方の資料とも考えられる。

### L'ARBRE DE GUERNICA



また、Sociedad de Estudios Vascos, EI-SEV のウェブサイトには、以下の譜例が示されている。

### GUERNIKAKO ARBOLA



また、BDB Bertsolaritzaren datu-basea のウェブサイトには以下の楽譜が示されている。

## GERNIKAKO ARBOLA (G) \*

Ger- ni- ka- ko ar- bo- la  
 da be- dein- ka- tu- a  
 eus- kal- du- nen ar- te- an  
 guz- tiz mai- ta- tu- a  
 e- man da za- bal za- zu  
 mun- du- an fru- tu- a  
 a- do- ra- tzen zai- tu- gu  
 Ar- bo- la san- tu- a  
 e- man da za- bal za- zu  
 mun- du- an fru- tu- a  
 a- do- ra- tzen zai- tu- gu  
 Ar- bo- la san- tu- a.

さらに、以前、ピカソ (Pablo Ruiz Picasso) の『ゲルニカ』について調べていた時に、4分

の2拍子で記譜された『ゲルニカの木 (Gernikako Arbola)』の楽譜を、目にしたことがある。

筆者には、この記譜は、いささか無理がある様に思えたので、今回は譜例を示すことはしないが、理屈だけで考えれば、そういう記譜も可能である。

つまり、これは、8分の5拍子で記譜されたものを4小節まとめておいて、それを、4分の2拍子で記譜した5小節にあてはめたものであった。こうなると、拍子の持つ拍節感は、あまり考慮されずに記譜されていることがわかる。

先にも示したソルチコのリズムの基本さえ、感じ取れば、拍子記号が二の次になっていることが、理解される。

同様に、これまでに譜例を挙げたり、言及したりした拍子による記譜についても見てみよう。中には、8分の5拍子とは、大変かけ離れた拍節感に思える、8分の6拍子による記譜も見受けられるが、これも、6/8を通分すれば、3/4になることを考慮すれば、8分の6拍子による記譜も可能となる。

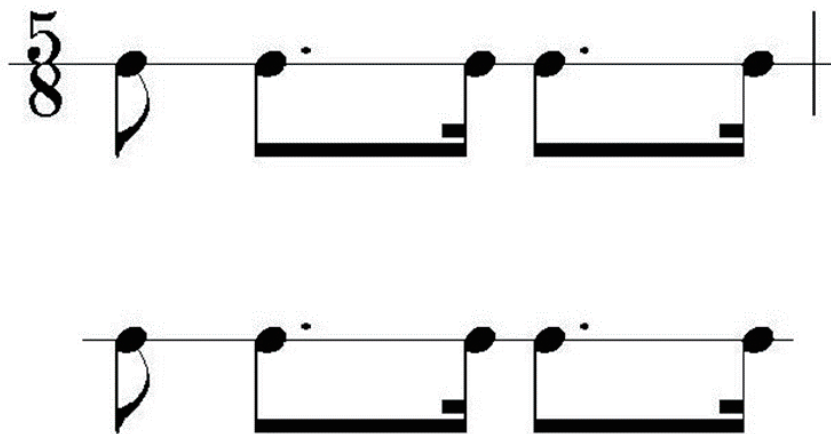
それでは、8分の5拍子と、4分の3拍子との記譜の関連について見てみよう。まず、ここでも、理屈だけで考えるなら、8分の5拍子の記譜6小節分と、4分の3拍子の記譜3小節分とを対応させれば、8分音符30個分のまとまりということで、記譜上の帳尻は、合わせるができる。

しかし、事はそう単純ではなさそうだ。先に挙げた4分の3拍子の記譜の譜例と、3種の、8分の5拍子の記譜の譜例を比較すると、そのあたりの微妙な差異が、現れてくる。8分の5拍子の記譜の中にも、歌いだしの“Gernikako Arbola”の「ゲ」の音の音価が、8分音符のものと4分音符のものがあったり、細かい部分での、付点音符の用い方に差異があったりするのである。

では、民俗音楽のソルチコとしての、『ゲルニカの木 (Gernikako Arbola)』の楽譜の規範性は、いや、音楽として鳴り響く音の規範性は、如何に、担保されるのであろうか。ここで、先稿で、譜例として示したソルチコのリズムパターンが、重要な役割を果たすこととなる。

ここで念のためその譜例を再掲しておく。





この、譜例にも示されたごとく、拍子記号も小節縦線を持たぬリズム表記が、わざわざ示されていることから、理解が及ぶように、下段のリズムパターンの枠組みが、楽曲全体を支配していることで、ソルチコとしての、存在感が示されていることがわかる。

民俗音楽のソルチコとしての、『ゲルニカの木 (Gernikako Arbola)』は、その記譜の拍子記号によるのではなくソルチコのリズムパターンにより、『ゲルニカの木 (Gernikako Arbola)』としての楽曲のまとまりを明確にしているものと考えられる。

Txistu と Tambor の奏者が、Tambor で刻むソルチコのリズムパターンが、民俗音楽としてのソルチコの楽曲のまとまりを保っているのと、同様に、ここで取り上げた、最もポピュラリティーのあるソルチコである『ゲルニカの木 (Gernikako Arbola)』に於いても、Tambor で刻むリズムパターンが、楽曲としてのまとまりを示し、ソルチコらしさを示す役割を担っているものと考えられる。

それでは、『ゲルニカの木 (Gernikako Arbola)』以外のソルチコで、楽曲としてのまとまりが如何に示されているのかを見てみよう。ここでは、他者の検証の便も考慮し、顕著にソルチコの特徴の表れている楽曲と、入手・確認しやすい楽譜を優先的に用いることを、できるだけ心がけることとした。

そこで、先稿でも述べた、フアン・イダルゴ・モントヤ (Juan Hidalgo Montoya) 氏らによって、『イスパニアのフォルクロレ (Folklore musical español)』として、編まれている楽譜集成全 1 2 巻の中から、“Canciones Populares Bilbainas”と“Cancionero del País

Vasco ”の2巻と、Jesus Fernandez Ibañez 著“Cien piezas vascas para flauta dulce”を、資料として、さらに関連楽譜を、パイス・バスコ文化に関する信頼性の高いウェブサイトから示し、民俗音楽としてのその他のソルチコを見ていこう。

“Canciones Populares Bilbainas”は、典型的なソルチコが、見当たらないため、今回は、この中の楽曲を分析することはしないものとした。

“Cancionero del País Vasco ”からは、舞曲としての典型とみられるソルチコの例を1曲取り上げる。この楽譜集成の終わりに、各地の舞曲をまとめた部分があるが、そこにそのタイトルも、“Zortziko”とされているものを見てみよう。

3.- ZORTZIKO

The musical score for "3.- ZORTZIKO" is written in 5/8 time and consists of four staves. The key signature has two flats (B-flat and E-flat). The melody is marked with various chords: Sol 7, Do m, Fa m, Do m, Sol 7, Do m, Sol 7, Do m, Do m, Sol 7, Do m, Fa m, Sol 7, Do m, Fa m, Sol 7, Do m, and FIN. The score includes a repeat sign at the beginning and end of the piece.

114

8分の5拍子で記譜されたソルチコの、一つの特徴であると筆者も考えている弱起で始まっており、典型的なソルチコと考えられる。そのうえ、舞曲のソルチコに特に顕著である典型的リズムパターンが随所にちりばめられている。この楽曲は、民俗音楽の舞曲のソルチコの典型とみることが出来るであろう。

このメロディーラインの民俗音楽の舞曲のソルチコを検索し、8分の5拍子以外の記譜



があるかを探したが、本楽曲については、見つけることが出来なかった。

次に、Jesus Fernandez Ibañez 著“Cien piezas vascas para flauta dulce”から、ソルチコの例をいくつか挙げてみよう。この書物は、バスク地方の教育の場に於いて用いられたリコーダーのための副教材である。したがって、バスク地方の人々にとって、広く知られ、重要である楽曲が、取り上げられている。そのために、ソルチコという曲種についても、典型的な例が見出されるはずである。

まず、Zortziko txikia と思われる一曲が、“Albako gultzurruna”である。筆者は、バスク語の詩形に精通しているわけではないので、この楽曲の詩が、Zortziko txikia であることを、BDB Bertsolaritzaren datu-basea という、バスク地方のデータベースを有するウェブサイトで、確認したところ、同一の詩が、Zortziko txikia であることが記されていた。

更に、同一のウェブサイトで楽譜を検索すると、同じ調性で記譜された、8分の5拍子の部分のみの楽譜を検索することができた。“Cien piezas vascas para flauta dulce”の譜面の末尾の8分の6拍子の部分はその中にはなかったが、これは、Zortziko txikia が、その本来の詩行の末尾に、場合によって別の詩形を持つ部分が付け加えられるという特色の、表れである。

この“Albako gultzurruna”にも、ソルチコ特有のリズムパターンが随所にみられる。しかしながら、8分の6拍子の部分には、そのリズムパターンが見つからず、別の詩形を持つ部分が付け加えられるという特色が、はっきりと示されていることとなる。

次にその譜例を示す。初めに、“Cien piezas vascas para flauta dulce”の譜面、次に、BDB Bertsolaritzaren datu-basea のデータベース上の譜面を示すこととする。

## Albako gultzurruna

Al - ba - ko gul - tzu - ru - na

aitz ba - ten ga - ñi - an — gi - zon bat a - rran -

tzu - an i - txas bas - te - rri - an

ka - ña - be - ra o - rre - kin za - bil - tzan gi - zo - na —

Jaun - goi - ko - ak di - zu — la zu - ri e - gun o -

na A - lai tu ta poz tu gai - te - zen

gaur - ko ga - ba - re - kin — gu - re Je - sus o -

na - ren e - to - rre - ra - re - kin .

**ALBAKŌ GULTZURRUNA I (B) \***  
**ZERTARA JOATEN DIRA I**  
**IPURZULOA ITXITA I**

Al- ba- ko gul- tzu- rru- na  
 haitz ba- ten gai- ni- an  
 gi- zon bat a- rran- tzu- an  
 i- tsas baz- te- rri- an  
 kai- na- be- ra ho- rre- kin  
 za- bil- tzan gi- zo- na  
 Jaun- goi- ku- ak di- zu- la  
 zu- ri e- gun o- na.

以上二種類の譜例は、ソルチコという民俗音楽の中で、8分の5拍子の記譜で示されることの多い特徴的リズムパターンの重要性を物語っていることがわかる。また、同時に、様々な拍子記号のもとで記譜されても、特徴的リズムパターンの存在により、ソルチコで

あることが、認識されることをも示している。

次に、“Cien piezas vascas para flauta dulce”から、別のソルチコの例を挙げてみよう。“Beltzarana”がそれである。この楽曲のタイトルは、バスク語圏の地域による正字法の異同により、“Beltzerana”と表記されることもある。この楽曲でも、ソルチコに特有のリズムパターンが活躍する。ところがこの楽曲の記譜のばらつきには、先稿でも述べたバスク語圏特有の拍の終わりの処理の仕方の揺れともかかわりのある差異が見られる。



## *Beltzarana*

Bel-tza- ra-na naiz- e - la ka-le - an di - o - te —

ez naiz zu-ri - e - de-rra a-rra-zo-ya du-te. —

E - der zu - ri ga - lan - tak pau-so - an a - ma

bi ——— bel-tza - ran gra - zi - o - sak

mi - lla - e - ta - tik bi E - der zu - ri - ga

lan - tak pau-so - an a - ma bi - - -

bel-tza-ran gra-zi - o - sak mi-lla e-ta-tik bi.

先に挙げたのが“Cien piezas vascas para flauta dulce”の譜例だが、楽曲の末尾の音符の音価が、4分音符になっている。ところが、BDB Bertsolaritzaren datu-basea のデータベース上の譜面を示すこと、以下のようになる。

### BELTZERANA NAIZELA (G) \*

Bel- tze- ra- na nai- ze- la  
ka- le- an di- o- te  
ez naiz zu- ri e- de- rra  
a- rra- zoi- a du- te  
e- der zu- ri ga- lan- tak  
pau- so- an ha- ma- bi  
bel- tze- ran gra- zi- o- sak  
mi- la- e- ta- tik bi.

ここでは、末尾の一拍は、8分音符と8分休符になっている。更に、euskomedia.org のウェブサイトの譜例でも、同様に、末尾の一拍は、8分音符と8分休符になっている。実際にその譜例を次に示す。

## BELTZERANA

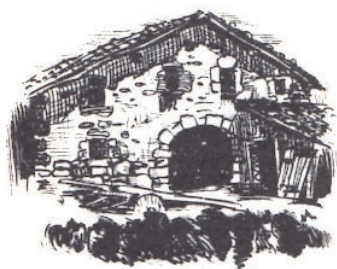
これらのソルチコは、詩の音節数から判断すると、Zortziko txikia に分類される。ここでも、あの独特のリズムパターンが、楽曲のまとまりを作り出している。また、音楽に、ある種の推進力を与えている。更に、バスク語圏特有の拍の終わりの処理の仕方の揺れも、顕著に表れている。

明確な音価のものさしとしての拍節感が、しっかりとした物差しとして機能しているというよりは、緩やかな枠組みとして用いられていることがわかる楽曲の例と言えよう。

次に、同じ、“Cien piezas vascas para flauta dulce”から、古くは、5拍子による記譜がなされていない例を挙げてみよう。“Nere andrea”が、それである。

“Cien piezas vascas para flauta dulce”は、(日本で考えるならば、)中学生以下の年齢層のための教材であるので、解りやすい、演奏しやすい記譜がなされているであろうし、広く一般に用いられている記譜が、採用されているはずである。しかし、古くから歌い継がれている楽曲であるとされる“Nere andrea”は、異なった拍子記号による記譜が存在している。ここにも、バスク語圏特有の拍の終わりの処理の仕方の揺れが現れていると考えられる。“Cien piezas vascas para flauta dulce”からの譜例と、先稿でも用いた、BIBLIOTECA DIGITAL HISPÁNICA のウェブサイトにある譜例とを示すことにする。





## Nere andrea

Ez - kon - ga - ye - tan zer - bait ba -  
 nin - tzan ez - kon - du - e - ta e - zer  
 1. Ez - ez - kon - ga - ez e - der - za -  
 2. li - a ba - nin - tzan e - re, as - per - tu  
 nin - tzan e - der - rez. Ne - re gus - tu - a e - gin nu -  
 en ta o - rain bi - zi naiz do - lo - rez.

2

Nere andrea andre ederra zan  
 ezkondu nintzan orduan.  
 Mudatuko zan esperanzarik  
 ere, betere ez nuan:  
 surik batere baldin ba-dago  
 maiz dago aren onduan.

3

Nere andrea alperra dago,  
 ez da munduan bakarrik;  
 gauza gozoen zalea da-ta  
 ez du egin nai bearrik:  
 sekulan ere ondo izango ez  
 alakoaren senarrik.

上記譜例“Cien piezas vascas para flauta dulce”より転載

Nº 30.

Nere Andrea.

Canto Vascongado.

Música de XXX.

Poesía de XXX.

*Andante.*

*ff*

1. Ez - con - ga - ye - tan cer - bait ba - nin - tzan ez - con - du

*Fin.*

*p*

e - ta e - cer ez. Ez - con - ga - ye - tan cer - bait ba -

*cresc.*

nin - tzan ez - con - du e - ta e - cer ez. E - der sa - li - a ba - nin - tzan

*cresc.*

A. Diaz y Cia editores San Sebastian.

D. y 49 Cts

e - re as - per - tu nin - tzan e - der - rez, Ne - re gus -

tu - a e - guin nu - ben ta o - rain bi - ci naiz do - lo - rez.

D. C.

2.  
Nere andrea andre aderra zan  
Ezcondu nitzan orduan,  
Mudatuco zan ezperantzario  
Ere batere ez nuan;  
Surio batere baldin badago  
Maiz dago arren ondian.

3.  
Zocoac ciquin, chimac jario,  
Aurra cincilio besoan,  
Adobaquia desegoquia  
Gona zarraren zuloan,  
Iru chiquico botella andia  
Danca berequin alboan.

6.  
Nere andrea goiz jaiquitzena  
Festara bear danean,  
Buruco miña eguiten zayo  
Asi baño len lanean:  
Zurequin cer guertatuco zan  
Nie bildurric ez nuan.

4.  
Nere andrea alferra da ta  
Ez da munduan bacarric  
Gauza gozoen zalea da ta  
Ez du eguin nai bearric,  
Seculan ere ondo izango ez da  
Alacoaren senarric.

5.  
Larumbatetic larumbatera.  
Garbitzen ditu zatar bi,  
Bere ayehec berotutzeco  
Egur erretan zama bi;  
Belaun bietan bana artuta  
Ez da isiltzen cantari.

D. y 40 C<sup>te</sup>

## NERE ANDREA.

Andante non troppo.

PIANO.

*p*

Ezeon - ga - ye - tan cerbait ba -

*p*

\_nin - tzan ez con - du e - ta e - cer - es Ezeon - ga -



5

-ye - tan cerbait ba - nin - tzan ezcon - du e - ta e - cer -

-es Ederr sa - li - a ba\_nin\_tzan e - re esper - tu

nin - tzan e - derr - es Nere guz - tu - a eguin nu -

\_ben - da orain bi - ci naiz do - lo - res.

(12)

## NERE ANDREA.

Ezeongaitan erhait banitzan  
Ezeondu eta ecer ez,  
Eder zalea banitzan ere  
Asperdu nitzan ederrez,  
Nere gustoa eguin nuen ta  
Orain biet naiz dolerez.

Nere andrea andre ederra zan  
Ezeondu nitzan orduan,  
Mudatuco zan esperantzari  
Ere hatere ez nuan;  
Surie hatere baldin bada  
Mala dago arren ondoan.

Zocoac elquin, chimac jario,  
Aurra cincille besoan,  
Adobaquia desgoquia  
Gona zarraren zuloan,  
Iru chiquico hotella audia  
Dauca berequin alboan.

Nere andrea alferra da ta  
Ez da munduan bacarrie  
Gauza gozoen zalea da ta  
Ez du eguin nai bearrie,  
Seculan ere ondo izango ez da  
Alacoaren senarrie.

Larubatetle larumbatera  
Garbitzen ditu zatar bi,  
Bere ayechee berotutzeo  
Egur erretan zama bi:  
Belaun bietan bana artuta  
Ez da isiltzen cantari.

Nere andrea goiz jalqitzenda  
Festara bear dancan,  
Buruco miña eguiten zayo  
Asi baño len lancan:  
Zurequin cer guertatuco zan  
Nie bildurrie ez nuan.





三種の譜例を比較してみよう。オリジナル・コピーライツが1978年のリコーダーの補助教材である“Cien piezas vascas para flauta dulce”は、旋律楽器であるリコーダーの演奏用に記されているのと、概ね、中等教育以下の年齢層を対象としているため、単旋律で、調合も、演奏が比較的容易な、 $\flat$ 一つの調号で記譜されている。しかし、拍子記号は、8分の5拍子と、一見、難しそうに見える。ところが、一般的に、ソルチコの記譜が、8分の5拍子で行われることが一般的になった今日においては、最も妥当する記譜ということになる。

したがって、“Cien piezas vascas para flauta dulce”においては、現在考え得る、一般的な方法にしたがって楽譜が掲載されていることとなる。

また、ソルチコ独特のリズムパターンについては、部分的な使用も含め、随所に鏤められていると見て良いであろう。歌詞の内容については、詳しく言及することは避けるが、順序の異同、正字法の異同の問題を除けば、三種の譜例が、同一楽曲であると考えても良いであろう。

19世紀に出版された二つの出版楽譜は、ともに、4分の3拍子で、記譜されている。

1896年に出版された“Ecos de Vasconia. Tomo II”では、 $\flat$ 三つの調号で、記譜されている。この調号での記譜は、BDB Bertsolaritzaren datu-basea のデータベース上でも、歌詞から検索すると、見出される。

1862年に出版されたとする“Nere Andrea”の楽譜は、 $\flat$ 五つの調号で、記譜されている。

旋律線の異同はあり、同一の楽曲とみにくい場合も生じるが、この歌詞を持つ楽曲は、8分の5拍子、8分の6拍子、4分の3拍子等で、 $\flat$ 系の調号で、多くの例を探すことができる。

それぞれが、ソルチコのリズム的特色を活かす旋律になっており、歌詞が、広く親しまれていたものが、伝承を経ていくうちに、旋律系に変化が生じたと、考えられる。また、踊りの付されたものに関しては、踊りの所作との関係で、旋律に繰り返しが生じたり、踊りの高まりに伴って、旋律が、上行形に変化したりした場合が考えられる。

ここに取り上げた、三種の譜例は、古くから、様々なヴァリエーションがあったことを想像させるが、歌詞と題名との両方で、様々なイスパニア国内の音楽データベースを検索すると、少なくとも三種類の拍子、三種類の調性のヴァリエーションを探ることが可能であった。

ソルチコのソルチコたる所以は、この辺りの、拍節感や、リズム感の揺蕩いにあると言えるのではなからうか。

これが、民俗音楽のソルチコを概観しての、筆者の考えである。

## EZKONGAIETAN ZERBAIT BANINTZEN (G) \*

Ez-kon-gai- e - tan zer-bait ba- nin- tzen  
 ez -kon- du e - ta e - zer ez  
 e - der za- le - a ba-nin- tzan e - re  
 as-per- tu nin- tzan e - de - rrez  
 ne-re gus - tu - a e - gin nu - en ta  
 o-rain bi - zi naiz do - lo - rez.

ここに挙げたものは、バスク地方のデータベースにアクセスし、最初に見つかった“Nere Andrea”に類似する楽曲の楽譜である。また、BIBLIOTECA DIGITAL HISPÁNICA のウェブサイトには、次のような楽曲が、取り上げられている。

この、Álbum de cantos vascongados の出版は、1904 年である。

II<sup>o</sup> ALBUM.  
DE  
CANTOS VASCONGADOS.  
ARREGLADOS PARA PIANO CON LETRA.  
POR  
J. MARTINEZ VILLAR.

№. 6. Ezcongayetan.

PIANO.

The piano introduction consists of two staves in 3/8 time. The right hand features a rhythmic melody with chords, while the left hand provides a harmonic accompaniment with chords and single notes.

CANTO.

The vocal line begins with a rest followed by the lyrics "Ez-con-ga-". The piano accompaniment is shown below, with dynamic markings *pp*, *f*, and *p*.

The vocal line continues with the lyrics "- ye-tan cer-bait ba-ni-tzan ez-con-du e-ta e-cer ez Ez-con-ga-". The piano accompaniment continues with chords and rhythmic patterns.

16

Sociedad anónima CASA DOTESIO.

40760

MADRID-BILBAO.



2

- ye-tan cerbait ba\_ni\_tzan ez con\_du e - ta e - cer ez E-der sa -

- li - a ba\_ni\_tzan e - re as\_per\_tu ni - tza e - der ez Ne\_re\_gus -

- tu - a e - guin nu-ben - ta o - rain bi - ci - naiz do\_lo - rez

40760 17

## まとめに変えて

こうして、様々なソルチコを見てくると、先稿の『エウスケラ バスク語と音楽的要素』に述べたように、音楽のフレーズの「纏まりのつけ方の差異」として指摘したバスク地方の特色が、ここにも現われているように思われる。

歌詞の語調を大切にし、言語の音楽的要素に充分気を使う。そんなバスク地方には、古来、歌垣の伝統があるといわれる。歌詞や詩が、心を伝える重要な手段であるとき、自ずとその語調に神経を使うのはごく自然なことであろう。そこに、拍節感の正確さよりも、言葉を伝えるための間が優先される。歌を伴わぬ時、その表現の中心は、音そのものと、踊りの所作である。そこで、枠組みである拍節感がもしも邪魔になれば、それに、融通を利かせても、表現を優先する。そんな、バスク人にとって、様々な記譜上の拍子は、何が用いられても不思議ではなく、8分の1拍子まで用いてしまう彼らの柔軟性に、筆者は、脱帽するしかないのである。

先に述べた“*Nere Andrea*”バスク地方に関するデータベースをもちいて、検索していた時に、*zortziko txikia* の例として目についたのが、次の譜例である。いくつか拍子記号を持たない記譜にもお目にかかったが、それよりもこちらの方が、はるかに、驚きであった。

言葉のつながり、表現上の抑揚やリズムを、十分に考慮した結果が、これだったのであろう。「音楽のフレーズの纏まりのつけ方の差異」は、ルースさから来るものではなく、言葉への深慮遠謀から来ているものであったようだ。

譜例のように目まぐるしく変わる拍子記号は、*zortziko txikia* の詩形の中で行われているものであり、ソルチコ特有のリズムパターンによりまとまりを持って存在しているのである。

## Nombre de la estrofa : Zortziko txikia (hg)

Ne - - - re kris - tau mai - te - ak

4  
hau da a - le - gri - a

7  
ar - - - - gi e - gi - ten da - go

10  
gu - - - - ri i - lar - gi - a

13  
a - - - - la - ba - tu di - tza - gun

16  
Jo - - - - se ta Ma - ri - a

19  
ain - - - - ge - ru - ak kan - ta - tu

22  
zi - - - - o - ten glo - ri - a



## 参 考 文 献 等

- Resurrección María de Azkue Aberasturi 著 『 CANCIONERO POPULAR VASCO 』  
出版社：Gran Enciclopedia Vasca
- Jesus Fernandez Ibañez 著 『 Cien piezas vascas para flauta dulce 』  
出版社：Gran Enciclopedia Vasca
- 池内 友次郎 他 編 『 新音楽辞典 楽語 』  
出版社：音楽之友社 東京 昭和61年
- 下中 邦彦 編 『 音楽大事典 』  
出版社：平凡社 東京 1982年
- Emilio Casares Rodicio 編 『 Diccionario de la Música Española e Hispanoamérica 』  
出版社：Fundación Autor - Sociedad General de Autores y Editores
- Jose Luis Ansorena Miranda 著 『 El Txistu y los Txistularis 』  
ウェブサイト上の記事  
<http://www.txistulari.com/contenidos/musikologia/>
- Karlos Sanchez Ekiza 著 『 En torno al Zortziko 』  
ウェブサイト上の記事  
<http://www.txistulari.com/contenidos/musikologia/zortziko.htm>